シネマをいろどる病と医療-26

「何者かになれなくても、私達には生きる意味があるのよ」

―“ハンセン病の老女”と“ムショ帰りの中年男”、あん作りが築いた心の交流

映画・健康エッセイスト　小守（こもり）　ケイ

「バイト、年齢不問？」。東京都東村山市。満開の桜の下の「どら春」に、近くのハンセン病療養所“天生園”の入所者、76歳の徳江が来る。「安くていいのよ、指が少し不自由だから」。40代半ばの雇われ店長、千太郎は不愛想にどら焼きを一つ渡して断るが、徳江は夕方、再び店へ。「お宅のあん、ちょっとね・・。私の作った粒あん、味見して」。一旦はゴミ箱に棄てた千太郎、なめてみると、いつもの“業務用あん”より格段に美味しい！

©2015 映画「あん」製作委員会／COMME DES CINEMAS／TWENTY TWENTY VISION／MAM／ZDF-ARTE
配給：エレファントハウス
写真：（左から）ワカナ、徳江、千太郎

「ここで働いていいのね!」

新緑の頃、徳江が店を覗くと千太郎が寄って来る。「手伝って頂けますか」。嬉し涙の徳江は深々と頭を下げ、連絡先を書く。手は甲が赤く変色してコブもでき、指は親指と人差し指以外、曲がって動かない。「大丈夫よ。ただ見た目がね・・」。

翌朝、夜明け前から店に出た徳江。「どら焼きは、あんが命よ」。テキパキと千太郎に教えながら　愛おしげに小豆を選り、半日かけてあんを炊く。11時に店を開けると、午後、常連のワカナら中3女子達が来る。「千ちゃん！美味しくなった！」。翌日は開店前から列ができ、てんてこ舞い！　連日、飛ぶように売れるので、奥にいた徳江も店頭に出て、手を隠さず客対応へ・・。

「バイトさん、ライ病施設の人じゃない?」

ある夕、店の経営者―千太郎が傷害で服役中に被害者への慰謝料を立替てくれた―の妻が現れる。「あの人？」。連絡先を見せると、確かに施設の住所！「噂が広まったら終わりよ。辞めさせて！」。その夜、酒をあおった千太郎、翌朝は不調で出勤できない。代って徳江が一人であんに加えて皮も焼き、接客もこなし、「完売お礼」の貼り紙も！

翌日、徳江の“活躍”を知った千太郎は覚悟を決める。「ここではご自由に」。大喜びの徳江！ワカナ達とも楽しくお喋り。「若いって良いわね」。しかし、或る日、突然ワカナが「指、どうされたんですか？」。ギョッとする千太郎！徳江は「若い頃の病気で曲がったの」と応じたが、ワカナは図書館に寄り、ハンセン病を調べた。

「子がいたら貴方の年頃に‥」

半年後の秋。急に客足が途絶え、事情を察した徳江が去った頃、ワカナが店に。「徳江さんは？」。慌てて酒瓶を隠した千太郎、「辞めたよ」。沈黙の後、ワカナが小声で「徳江さんの指のこと、母親に」と言うと、千太郎は「彼女を守れなかった俺が一番悪いんだ・・」。

「いつからここに？」。二人が紅葉の美しい天生園を訪ねると、徳江はぜんざいを振舞いながら「中学の頃、兄に連れて来られたの。以来、出産や就職など社会生活も許されず、施設内だけの日々を過ごすには“あん作りが生きる知恵”だった」と語り、千太郎に厚く礼を。「店長さん、店は本当に楽しかったわ・・」。

その後、店の改装で居場所を失った千太郎が再び訪ねると、徳江はあんの道具を遺して3日

映画「あん」

河瀬直美 監督、2015年、日本
原作：ドリアン助川

前に肺炎で亡くなっていた。「店長さんは自分のあんを作れる方です。自信を持ってご自分の道を歩んで下さい」。その言葉に感涙の千太郎、あんの完成を固く誓った・・。

Cinema View

樹木希林（徳江役）の最後の主演作で日本アカデミー賞優秀主演女優賞受賞作。河瀬直美監督ならではの美しい四季の映像の下、隔離生活から初めて社会に出た徳江が自らの尊厳の源の“あん作り”で楽しく働き、同じく逆境に生きる千太郎（永瀬正敏）に“仕事の意義や楽しさ”を伝える物語。ワカナ（内田伽羅）は樹木の実孫。

特効薬で完治するも隔離され続けたハンセン病患者

監修
公益財団法人
結核予防会　理事
総合健診推進センター　所長
宮崎（みやざき）　滋（しげる）

ハンセン病は結核と同じ抗酸菌属の“らい菌”による感染症である。らい菌は感染力が弱く、乳幼児期に濃厚接触がない限り感染しないが、感染すると数年～数十年後に皮膚の発疹や環状紅斑、結節が発現し、発疹部位に知覚鈍麻、麻痺、脱毛が起こり、顔や手指、足には重度の変形が生じる。らい菌は発育至適温度が摂氏31度のため、皮膚や末梢神経を侵すが、内臓器官は侵さないので、ハンセン病では死亡しない。

ハンセン病は、以前は治療法もなく、外見上の変形から不治の遺伝病とされ、本人のみならず家族も偏見や差別に晒され、患者は家族からも追われるように“放浪らい”として全国各地をさまよった。その為、1907年以後、患者は各地に設置された療養所に隔離され、1931年に始まった強制隔離政策では、収容されると名前を変えられ、社会から切り離され、断種や中絶手術を受けた。

1943年に特効薬のプロミンが開発され、リファンピシン、クロファジンとの多剤療法により半年から数年で治る病気になったが、隔離は1953年に制定のらい予防法の下でも続き、1996年の同法廃止後も続いた。隔離は感染症対策では有効だが、ハンセン病患者は科学的根拠もなく長年社会から隔離、差別されてきた為、1998年に国を提訴した。国は2001年に「国による人権侵害」であることを認め、患者に謝罪した。